

埼玉平成高等学校 講演

テーマ「床もUP！？日本語もUP！？ ～すべての仕事は『プレゼン』である～」

講師 アップコン株式会社 代表取締役社長 松藤展和氏



“人と人をつなぐ言葉を適切に使い、人前で自分の考えをきちんと伝えることのできる、優れたプレゼンテーション能力をもつ人間を育てたい”。埼玉平成高等学校では、日々の指導の中に「言葉の時間」を設けて日本語と英語の2か国語を磨き、日本語検定・英語検定に取り組む学習を行っている。目指すは、言葉に強い生徒の育成。年に一度開講される「言葉の教育」講演会には、今年も中学生を含む千百名が受講。講師は、自身の体験談からビジネスにおける日本語力を熱く語る、アップコン株式会社社長の松藤展和氏。

傾いた建物の床を平らにする。私の会社「アップコン」が手掛ける仕事です。日本語と無関係に見える私が、なぜ、本日の講演を務めることになったのか。実は、わが社では、日本語検定を重要な資格に位置付けています。みなさんのように、学生の時に勉強しておけば良かったのですが、時すでに遅し。全社員、入社して日本語検定の資格取得に奮闘しています。床を上げて、日本語力も上げる。まずは、私の話からお聞きください。

苦手分野を毎日磨けば 得意分野に変わる

小学生の私は国語が大の苦手、覚えるのが難しい漢字も、もちろん苦手。ところが、中学生になると、“国語が理解できなければ、理科の教科書も社会の教科書も、何が書いてあるのか解らなくなる”と不安になったのです。実際、理解に苦しみ始めていました。目に留まったのが、新聞の一面に掲載されるコラム。そこで、コラムを読み、自分なりに100字に要約することを、国語の先生と決めました。朝読んでまとめ、昼休みに先生に提出、放課後に添削された文章を返してもらうことを、日課にしたのです。

始めた頃は、要約しようと思ってコラムに書いてあることがまるで解らな

い。ところが、中学時代続けた結果、高校に入ると現代文の成績は学校でトップ、全国模試では全国2位の快挙。その国語力を買われ、生徒会長の立候補者3名の演説原稿を、すべて私が書くことになり…。日々触れているもの、学んでいるものこそ得意分野になると実感しました。

大学での専攻は建築の設計。今、オリンピックに向けてスタジアムを作っていますね。設計者は、有名な隈研吾先生。テレビで、スタジアムの概要について説明していますが、私でも理解に苦しむ言葉がたくさんあります。一般の視聴者に対して話しているはずなのに、解らない。私にとっては大学の講義も同じでした。先生は、“専門の勉強をしている学生に話しているのだから、このぐらいは解るだろう”というつもりで話すのですが、私には理解できない。相手に届かない話し方（言葉）があることを知り、伝わる言葉への興味を強くしました。

目標に到達するためには 努力を惜しまない

大学卒業して就職しましたが、しばらく経って、ニューヨークの大学院でインテリアデザインを学びたいと思うようになりました。ところが、高校時代の英語

は10段階評価の3。当然、赤点クラス。1学年405人の中で下から数えて30番目という、ひどい成績でした。渡米して大学院に行くなんて夢の話。それでも、ニューヨークで学ぶことが最優先でした。英語ができるから行くのではなく、行きたいから英語を勉強する。会社員として働きながら、半年間は語学専門学校で集中的に勉強し、ニューヨークへ。当時の英語レベルで大学院に入れるはずもなく、さらに、半年間は英語専門の学校へ。ようやく大学院の試験に受かったのですが、授業の出席は認められたものの英語力が足りず、英語学校にも引き続き通うという条件付きでした。半年間、大学院と英語学校の往復。週に2日は徹夜しながら猛勉強した結果、授業についていけるだけの英語力が身に付きました。

大学院を卒業後は、ニューヨークで1年、シドニーで14年間の会社勤め。シドニーでの仕事は、主に建築とインテリアデザインの設計です。9年間働いた後、自分の会社を設立。シドニーオリンピック後に会社をたたみ、現地企業の日本支社長として日本に戻りました。その会社を退職後、2つ目の会社を興し、3つ目に設立したのが現在の「アップコン」。主な仕事内容は、床下のコンクリートに特殊な発泡ウレタン樹脂を入れ、ウレタ

ン樹脂が液体から固体になる過程で膨らむ力を利用し、傾いた床を元の水平に戻すこと。東日本大震災の時に50cmの段差ができた住宅や、千葉県浦安の液状化によって13cmの高低差が生じた体育館の床も修復しています。



文章能力を上げるために 日本語検定を活用

私の会社は、建設業の中でも新しい物件を建てるのではなく、出来上がったものを修復する仕事です。簡単に仕事の流れを説明しましょう。まず、お客様から“床が下がっているので見に来て下さい”と「①問い合わせ」が入ります。続いて、社員が現場を見に行く「②調査」へ。調査を終えると「③調査報告書」を作成します。調査報告書に基づき、修復にかかるコストや日数などをお客様へ提示。契約が成立すれば仕事が発生します。これが、「④見積もり・受注・契約」。そして、「⑤施工」が始まり、終わった時点で「⑥施工報告書」を作成。完全に修復できたか、できなかったのはなぜか、結果とプロセスを詳細に書きます。みなさんも、スポーツの試合後には必ず反省会をやりますよね。それと同じです。試合の勝ち負けだけではなく、何が悪かったのか、今後の試合はどうすべきか。仕事においても、結果だけに終始するのではなく、次へつながる改善策が重要になります。

この流れの中で、最も重要で、お客様への迅速な対応を要求されるのが、「③調査報告書」と「⑥施工報告書」の作成です。ところが、日本語検定を取り入れる前は、訂正が多く、作成に多くの時間を費やしていました。誤字・脱字が多い、読んだ人に伝わらない。なんとか改善しなくては、と何段階にも分けた社内チェックを始めたのですが、今度はチェックの時間がかかりすぎる。もっと効率よくできないか。そこで、報告書を書くための文章能力を上げようと、全社員で日本語検定に取り組むことにしました。最初から間違いのない報告書であれば読んで終わり。それに、間違いをチェックする仕事なんて面白くないですからね。さらに、資格取得者には手当を付けました。全員が持つ3級には付きませんが、2級は1万円、1級は1万5千円を支給。1級は国家資格の一級建築士と同レベルですから、それほど日本語検定の有効性を重要視しているのです。また、わが社には定年退職がありません。昨年退職した人は80才。資格手当も退職するまでもらえるので、一生涯で考えるとかなりの収入増です。

日本語検定の取得実績と 社員の日本語力は比例する

‘14年からスタートし、初年度の6月は11名(3級9名、2級2名)が取得し、東京書籍賞優秀賞(団体賞)をいただきました。同年11月の試験は19名(3級14名、2級5名)。当時は社員36名でしたから、半数の社員が取得したことになります。実は、この時受賞した長谷川君の存在が、ほか社員に拍車をかけました。長谷川君は、何を言いたいのか、書きたいのか解らないと言われていた社員。そんな彼が、半年～1年かけて勉強し、3級で全国1位、文部科学大臣賞まで受賞したのです。“彼ができたなら私もできる!”とみんな俄然やる気になり

ました。翌年の’15年は、なんと33名(3級27名、2級6名)。現在では、ほぼ全員が3級を取得しています。

取得した日本語検定がどう仕事に役立っているのかというと、たとえば先ほどの報告書。日本語検定を始める前は、1つの報告書を完成させる全社員の平均は7.87時間。つまり、まる1日かかり。3～5日かかる社員もいました。提出回数も2.8回、約3回にも。ところが、日本語検定の取得者が半数になった頃、作成時間は半分の3.71時間に。現在は2.5時間ですから約1/3に短縮されたわけです。提出も1.2回で約1/3。ほとんどの報告書が、完璧な仕上がりで提出されます。作成者もチェックする人も大幅な時短になり、報告書以外の仕事に着手できるようになりました。生産性が上がり業務の効率化ができたことは、会社にとっても大きな功績です。さらに、日本語検定の6つの領域(敬語、文法、語彙、言葉の意味、表記、漢字)は実践でも役立つ、お客様からの信頼を得ています。



仕事に不可欠な力 “話す・書く・読む”

「すべての仕事はプレゼンである」。御校の指針にも、“優れたプレゼンテーション能力をもつ人間を育てたい”とありますが、会社に入ると、さまざまな状況でさまざまな相手に対し、プレゼンを行う

機会が生じます。プレゼンとは、情報伝達の手段で相手の理解や納得を得ること。日本語力の高さがプレゼンの良し悪しを左右します。仕事は1人でやるものではありません。チームで働きます。互いの意思疎通を図る、円滑に仕事を進める、そのためにも日本語力は不可欠です。

野球のピッチャーなら三振を取って勝率を上げる、サッカー選手ならゴールを決める、ミュージシャンは抜群の歌唱力で魅了するなど、プロフェッショナルな人々の仕事は、価値ある能力で評価されます。ところが、スポーツ選手や音楽家、芸術家になれるのはほんのわずか。ほとんどの人は、仕事で話す日本語、書いた書類やメールを通じて評価されます。正しい敬語で電話対応ができる人や、論理的なレポートが書ける人は、社会人として十分通用しますが、たいいていの人ではありません。読むということに関しても、読めない人や、読めても理解できていない人が多い。話す、書く、読む能力は、仕事で徐々に養われますが、高めるには仕事だけでは不十分です。

日本語力を鍛えるためにも、お勧めしたいのが読書。新聞でもネットでも、ふだんから長文になじんでおく。読む機会を増やせば、日本語を確実に理解できるようになり、話し方も書き方も上達します。わが社にも年間で300冊の本を読む社員がいますが、年間で数冊しか読まない人に比べたら、この差は大きい。1000～3000円で日本語力が身につく幅広い知識も手に入る。読まない手はありません。話す、書く、読む。いずれも仕事に必要な手段です。生まれた時から使っている日本語の力が、果たしてどのくらい身についているかを知る意味でも日本語検定は有効です。知ったうえで1級ずつ上を目指せますから。



正しい日本語は 人生の有効な武器になる

さて、今日6月1日は就職の面接選考開始日です。わが社も採用しますが、入社する学生に、ウレタンを使った特殊な技術を学んでいる人は1人もいません。この工法を大学で教えている先生は世界に1人もいないからです。ですから、わが社では、学生時代が終わったら勉強も終わりではなく、会社に入ってから勉強します。学生時代は学校の勉強、入社後は仕事や人生に役立つ勉強。採用面接の際には、“卒業してきてね”とは言いますが、成績証明書は見ません。小中高大と16年間勉強していますが、定年が延びている今の時代、会社で働く期間は40年以上。勉強期間も学生時代よりはるかに長いですから、16年間の成績よりも入社後の頑張りを評価したいのです。入社すると10年間毎年1つずつ何かの資格を取ってもらいます。10年間

勉強し続けて複数の資格を取った人と、いい大学を出て大企業に入ったものの勉強はしない人、10年後には差が出ますよね。10年後というと、32～33才。社会人としてはまだまだ若い。その若さで、これから歩む自分の道に必要な資格を携え、人間力を備えるのです。全国に同年代は約100万人いると言われていますが、この100万人に対し、10年後には資格も含めた総合力で、全社員が各年代のトップ5000人に入ることが、わが社の目標です。

御社のホームページにもある“言葉を大事にする学校”、みなさん、ぜひ自慢してください。社会に出た時に、正しい日本語が話せない人がほとんどです。日本語も英語も大事なコミュニケーションツール。40～50代から始めても使えるのは30年程度ですが、10代で正しい日本語を身につければ、70年も使えます。日本語力は一生自分を支える武器。みなさん、楽しんで日本語を学びましょう！

